

「教育活動全体の中に位置づけたN I Eの実施」

神戸市立有野北中学校 校長 磯辺 次雄
教諭 佐々木 隆光

1、はじめに

本校は神戸市北区に位置し、開校 14 年目の比較的新しい学校である。生徒数は各学年 190 人前後で、5 学級ずつと特別支援学級が 2 学級である。地域の状況については、神戸市中心部のみならず、大阪まで通勤して仕事をしている家庭も多く、仕事から複数の新聞を購読している場合もある。一方で、昨今の時勢からか、新聞を全く購読していない家庭も各学年に 10 戸以上は存在する。これについては、「テレビやインターネットなどで情報を手に入れるため」という回答が多くあった。

また、新聞を購読している家庭であっても、生徒自身は「まともに新聞を読んだ経験がない」という場合も多い。本校で行った生活アンケート (fig.1) では、生徒が情報を得るための媒体を調査した。その結果、テレビのニュース番組が半数近くを占め、新聞はインターネットの約半分の活用率にすぎない実態が分かる。

このような中で、2013 年度の 2 学期から 2014 年度いっぱいまで N I E 実践指定校と

しての活動が始まることとなった。以下に当初の目標を挙げる。

【生徒に対しての目標】

- ①新聞に興味を持たせる。
- ②新聞の有用性を認識させる。

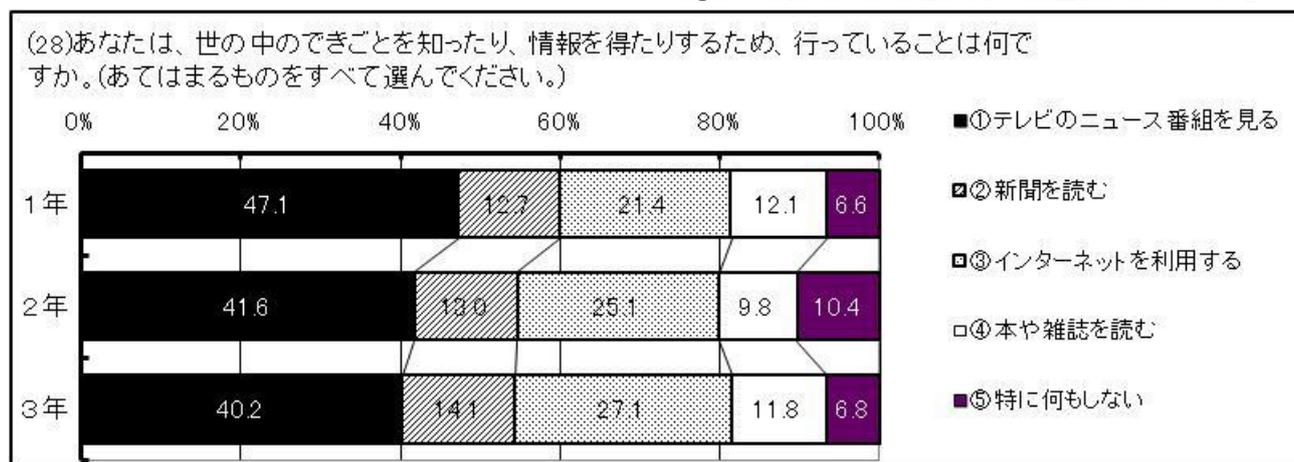
【学校としての方策】

- ①全職員に周知し、学校全体で取り組む。
- ②従来から行われている教育活動の中に N I E を位置づけ効果的に実施する。

2、全体の計画と現状

実質、1 年半にわたる取り組みということで、最初の 2013 年度の半年を準備のための前期、2014 年度の 1 年間を本格実施のための後期と位置づけ、N I E のスムーズな浸透を心がけた。次ページに、2 期に分けての主な取り組みの計画や実施状況を記す。

fig.1 「有野北中学校 2013 年度生活アンケート」



1 前期 (2013年度9月から3月)

特に、生徒目標の「①新聞に興味を持たせる」ことと、学校方策の「①全職員に周知し、学校全体で取り組む」ことに重点を置いた。

| | |
|-----|--|
| 7月 | ◎職員会での周知 指定校としてのスケジュールと新聞配達計画の周知 協力の要請とアイデアの募集 ◎生徒への周知 新聞感想文コンクールに向けての説明 |
| 8月 | ◎新聞感想文コンクール作品の制作 ◎新聞配達用ポストとNIEコーナーの準備 |
| 9月 | ◎新聞感想文コンクール出品 (2年生) ◎コンクールを活用した授業 |
| 10月 | ◎文化発表会でのNIE展示 ◎公民分野での新聞活用授業 (3年生) |
| 11月 | ◎トライやる・ウィーク (職業体験) での神戸新聞社訪問 (2年生) ※2013年度は日程が他校と重なり未実施 ◎考査での新聞に関する出題 (3年生) |
| 2月 | ◎職員会での周知 来年度に向けての確認 |
| 3月 | ◎NIE旧担当者会 2013年度総括と2014年度の取り組み素案作成 |

2 後期 (2014年度4月から3月)

特に、生徒目標の「②新聞の有用性を認識させる」ことと、学校方策の「②従来から行われている教育活動の中にNIEを位置づけて効果的に活用する」ことに重点を置く。

| | |
|----|---|
| 4月 | ◎職員会での周知 NIE新担当者の実践指定校としてのスケジュールと新聞講読計画の周知 (fig.2) 協力の要請とアイデアの募集 ◎NIE新担当者会 2014年度の取り組み具体案作成 |
| 5月 | ◎NIE担当者が各学年で、具体案を説明し、学年単位で実施していく |
| 今後 | ◎計画を順次実施していく 3年生 修学旅行新聞作成 記者派遣事業 2年生 校外学習新聞作成 朝NIE 1年生 新聞閲覧スペース |

※小考

せっかく多くの新聞が手に入るので、小規模な活動ではもったいない。しかし、担当者だけでは各学年の実状に応じた取り組みが進めにくいので、各学年にNIE担当者を1人以上配置し、担当者会を設けて、学年を中心に実施していくとスムーズであり、学年の実状や行事予定などに対応しやすいというメリットが得られた。

fig.2 「2014年度有野北中学校新聞講読計画」

※学校で注文した2紙は通年となっている

| 新聞 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 神戸 | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ |
| 朝日 | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ |
| 毎日 | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◦ | ◦ | ◦ | ◦ | ◦ | ◦ | ◦ |
| 読売 | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◦ | ◦ | ◦ | ◦ | ◦ | ◦ | ◦ |
| 日経 | ◦ | ◦ | ◦ | ◦ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◦ | ◦ | ◦ |
| 産経 | ◦ | ◦ | ◦ | ◦ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◦ | ◦ | ◦ |

3、新聞感想文コンクールと諸相

本章では、2013年度の大きな取り組みであった新聞感想文コンクールについて報告する。

2013年度は2学期からのNIE開始が予定されていたので、1学期末に夏休みの課題として「第4回ひょうご新聞感想文コンクール」(fig.3)を設定した。

NIEの本格的な取り組みの前に、新聞記事を深く読み込むという体験を全員に持ってもらうのが、主な目的である。夏休み前の授業や、集会でコンクールの要旨を説明し、独自に作成した要項や専用の原稿用紙を配布した。



また夏休み中に複数日の“NIEの日”を設定し、感想文執筆の相談や新聞が手に入らない生徒へ新聞提供などのサポートを行った。

完成した作品は夏休み終盤の学年登校日に回収し、推薦作品の選考を行った。さらに、この時に全作品をコピーし、優秀作品については新聞記事も含めて、コンピューターでスキャンしデータを残した。(fig.4)

2学期に入ると、授業で優秀作品などを紹介した。そして、10月の文化発表会で、社会科として展示室を設けた。展示内容は優秀作品の本文と新聞記事をパネルにしたものである。特に、写真のきれいな記事については、拡大して展示することで印象に残る見せ方ができた。(fig.5)



fig.4

「生徒の提出した感想文」

また、一括展示により、同じ事象に対しても各新聞で論調の異なる記事があったり、同じ事件に関しても感想文によって様々な受け止め方があることが一目瞭然であった。

fig.5「文化発表会での展示の様子」以下3枚



新聞コンクールの成果については、生徒が新聞に興味を持つ良い機会になったし、展示などのフィードバックを通して、新聞の特徴を捉える良い教材にもなったことである。



課題としては、より学習効果を深めていく方法の実践がある。例えば、優秀作品の選考なども、授業内に生徒同士で行えれば、より多くの記事、作文に目を通すことになるだろう。しかし、コンクールという性質上、提出に締め切りが存在するので、今回は日程の都合上、実践には至らなかった。

4、おわりに

全体的な流れの中での成果は、NIEの取り組みに関わる教師が分担作業を行った結果、スムーズに進んだことである。全校的な大きいプロジェクトの実施とは別に、生徒の日々の活動にNIEをコツコツと組み込んでいく場合は、NIE担当を校務分掌として確実に確保し、複数人で分担して取り組んでいくのが効果的である。それぞれの学年の担当が、その学年に対して働きかけを行うことで、学年間でもNIEに対しての協力が生まれていく場面もあった。

課題は、全校的なプロジェクトをどのように進めていくかである。プロジェクトの内容にもよるが、年間行事計画との兼ね合い、そして職員の理解と協力が必要となり、日程的にかなり余裕を持って、取り組んでいく必要

があるだろう。また、冒頭に挙げた生徒への生活アンケートで、新聞の活用率が上がるような結果につながる取り組みを、より具体的に検討していく必要がある。つまりそれは、NIEによって、どれだけの生徒が新聞の価値に気づいたかということと関連付けられるのではないだろうか。また、生徒が実生活で新聞を活用するかどうかは別とした観点も必要である。つまり、このNIEで生徒のどんな能力が育まれたかの検証である。これについては、朝NIEなどの取り組みの中で、いかにデータを収集し、分析していくかを検討する必要がある。

最後に、新聞閲覧スペースについては、玄関近くの全学年の日番が集合する場所と、1年生のフロアの2カ所に設けている。(fig.6) このNIEコーナーの盛況ぶりも、実践の成果を判断する上で、重要な指針になると考え、ますますの充実を目指している。

fig.6「新聞閲覧スペース」

